## 明治維新150年特集

# 坂本龍馬の太宰府訪問

## 太宰府の文華

～公文書館だより㊶～

慶応元（1865）年2月、尊攘派の公家三条実美をはじめとする五卿が太宰府天満宮の延寿王院に謫居してから、太宰府には、勤王の志士が頻繁に出入りするようになります。土佐藩出身の坂本龍馬もその一人で、同年5月23日から28日の間、太宰府を訪問し、五卿にも拝謁しました。五卿の一人東久世通禧は、彼の日記に「偉人なり、奇説家なり」との龍馬の人物評を記しています。

龍馬は太宰府を訪れる前は鹿児島に滞在しており、西郷隆盛らと交わる中で、天下国家のためには、当時反目しあっていた薩摩藩と長州藩が手を結ぶしかないとの意を強くします。そして長州藩を説得するため自ら出向く途中、太宰府に立ち寄ったのです。

龍馬はこのとき藩命でたまたま太宰府に来ていた長州藩士小田村素太郎（楫取素彦）と出会います。同席した同藩士時田少輔（時田光介）は、龍馬との面会を次のように述懐しています。

両人（小田村・時田）同席にて坂本氏に面会いたしましたところが、坂本氏は初面会の挨拶をおわるや否やただちに、薩長が今日の如く隔離しておっては、とても王政復古の事業を成就することはできぬ、互いにこれまでの行掛りは忘れてしまって今日より提携をして、大いに国事に尽さねばならぬと思ふが、いかがであるかお前方の考えはどうかといふことであった。

（『史談会速記録』第二二二輯）

小田村らは確かにその通りであると同意したものの、自分たちに回答の資格があるわけでもないので、帰って藩内の重要な地位の者に話をすると約束します。

龍馬はこの後、小田村・時田の周旋のもと、下関において当時長州藩で重用されていた桂小五郎（木戸孝允）と対談し、同盟問題を協議するため西郷と下関で会談することを承知させます。実際の薩長同盟の締結は、京都において慶応2年正月に行われますが、小田村自身も後に太宰府における龍馬との邂逅を「薩長講和の開始」であったと振り返っていますので、ここ太宰府において薩長同盟実現へ一歩近づいたと評価してよいと思います。

太宰府市公文書館　朱雀　信城